

# 言語／ジェンダーのポリティクスから見る芥川龍之介の生成

## —『支那遊記』を中心に

黄 珺亮

### 目次

はじめに

1. 「黄色い顔」：言語のポリティクス
2. 近代的身体の感受性：衛生とジェンダーの側面
3. 「盲目」の目：反・紋切り型

おわりに

### はじめに

旅をするということは、たしかに近代特有の行動とは言えないが、モダニティや文化のディスクールにとって豊かな表象と記号が生まれる重要な体験になっているとは言えよう。「かつて『発見』『覚醒』『交換』という指標タームを持ち得た旅(travel)、旅行(trip)という言葉は、近代における観光(産業)(tourism)の派生と進展・巨大化に伴うあらゆる事象や空間、時間の『消費記号』化によって」<sup>1</sup>、前近代とは異なり、ごく普通の大衆がグローバルな規模で流動する事態を意味するようになった。中川成美は、近代のさまざまな言説に登場する「ツーリズム」は、「常に自らが帰属する〈場〉に回帰する、言い換えれば自己がアイデンティファイしていると確信する『国民国家』の自明性なくしては成立し得ず、その行程の狭間に見出すものはその自分が所有すると信じる『国民文化』との対照項によってしか成立しない」<sup>2</sup>と述べ、近代国家の境界線を強く意識しつつ、グローバルなツーリズムを「西欧近代」と資本主義のコンテクストのなかに置いて考察している。しかし一方では、そうした〈場〉やアイデンティティ、そして「国民国家」や「国民文化」のシニフィエは、旅行者にとって必ずしも最初から自明のものであるとは限らない。それらは、旅行をとおして大きく変

容し得る概念だと思われる。旅行はつねに越境の意味を持ち、出発地から目的地への移動によって成り立つ行為である。とはいえ、「自分」と相手との間の二元的交換や対照・対比ばかりが強調されすぎてしまうと、身体的な存在としての「自分」が旅行先の〈場〉に切り込んだ瞬間、そしてその瞬間に次ぐ瞬間も、またその次の瞬間も、「自分」のなかで継続的に革命が起こっているという事実が見えなくなる恐れがある。さらに言えば、最初から「自分」なる主体を設定し、主体がこれから出会うであろう他者とはまったく無関係のものとしてあつかうのは、論理的妥当性を欠いている。「自分」とは、いわゆる他者との出会いによって不断に新しく構築されるものだからである。

旅行が一種の体験である以上、そこに何よりもまず関わってくるのは「身体」である。日常から脱出し、非日常を自らの身体で経験するのが旅行である。中川も「想像的機制」として着目した「自分」のアイデンティティや、自分が所属する「国民文化」などは、たしかにルイ・アルチュセールが言う「国家のイデオロギー諸装置」を通じてあくまで概念として浸透する。しかし目的地において他者と向き合う瞬間まで、それらが身体を経験となることはない。旅行先で、<sup>シーイング</sup>見ると<sup>ヒアリング</sup>聞くという比較的受動的な行為において目と耳という感覚器官が機能し、<sup>スピーキング</sup>語るという積極的な行為において声帯が働き、そして脳で情報が統合され反芻されることで、これらの概念ははじめて体験となるのである。言い換えれば身体の感受性によって、それらの情報が旅行先に着く前とは別の次元の記憶として刻まれていく。つまり、旅行先の空間でこそ身体的な「自分」が生まれるのだ。

<sup>1</sup> 中川成美『モダニティの想像力——文学と視覚性』、新曜社、2009年、34-35頁。

<sup>2</sup> 同上、35頁。

前田愛の文学テキスト論<sup>3</sup>を参照し考察するならば、一種のテキストとしても解説し得る旅行先の空間と、旅行者がもつ現実の身体という空間とが、二つの次元として浮かんでくる。文学テキストの読者のように、目的地の空間に入る瞬間、旅行者は、空間の「零点」として定位されていた現実の身体をまなざしや想像力の運動に溶かし込むことで、テキストのなかに仮構された定位の中心となり、そこで身体の位置が新たに決定される。一方、(他者によって)構築された文学テキストの読者とは違い、旅行者の場合は語り手も本人であるため、想像力によってもう一度素材を結びあわせるだけでは、テキストの「内空間」が構成されることはない。読者は、自分の目の届かないテキストの彼方にある非在の対象への志向関係をつくりだすが、その過程で出現する空間を、「内空間」にかんする議論で前田愛は「想像力によって志向された空間」と呼び、「表象としての空間」と対立させる。この定義を前提とするならば、「想像力によって志向された空間」のみを頼りとする文学テキストの読者とは違い、旅行者は、直観像を包含する「表象としての空間」も手がかりとしつつ旅行先の「内空間」を構築する、と言えるだろう。文学テキストとは異なり旅行においては、非現実の世界のひろがりや、「表象としての空間」を包み込み、かつそれに支えられるというかたちで現働化されるのである。それゆえ「表象としての空間」における身体的経験に注目せず、「想像力によって志向された空間」だけを中心に置いてテキストの「内空間」を議論することは、旅行についての語りを文学テキストとしてしか読み取らないことであると考えるを得ない。

本論文が芥川龍之介の『支那遊記』<sup>4</sup>を読み直そ

うとする動機は、身体論の視点から見て非常に興味深いこのテキストが芥川のほかの作品に比べて大きく無視されてきたこと、たとえ取り上げられるとしても、「芥川龍之介文学における中国像」や「芥川龍之介の支那趣味」といったぐあいに、まさしく「想像力によって志向された空間」としてしか読まれてこなかった、ということにある。たとえば紅野敏郎は、『支那遊記』が「動きつつある中国、苦悩する中国、つまり現実の中国への熱心な関心、もしくは猛烈な好奇心につき動かされての執筆よりは、中国の風物、雰囲気、名所旧跡への興味がより強く働いての執筆となっている」<sup>5</sup>と述べており、『支那遊記』で描かれた「風物、雰囲気、名所旧跡」に注目して、紀行文のテキストを通じて当時中国の様子を知ろうとする態度に終始している。しかし、芥川が描出した 1921 年の中国の風景はけっしてロマンティックなものではないと、多くの研究者がすでに指摘している。同じテキストを読む陳孜君は、「芥川が中国に見たのは雰囲気や名勝を破壊する『赤と鼠と二色の、俗悪恐るべき煉瓦建て』の西洋館だった」と指摘し、「中国にいる『西洋』を追い出そうとする芥川の発言には、中国を『他者』と見ず自己の一部と見る帝国日本の膨張主義と似た趣がある」<sup>6</sup>と結論づけている。これとは対照的であるのが秦剛の説である。秦は『支那遊記』の一卷は、中国という他者の鏡像に映った日本が描出されたテキストとしても読め、

---

月から 9 月にかけて、「江南遊記」(全 29 回)は 1922 年 1 月から 2 月にかけて『大阪毎日新聞』に連載されたが、芥川の体調が崩れたため旅行記がそれきり中断してしまい、残りの「長江遊記」は 1924 年 9 月に雑誌『女性』に、「北京日記抄」は 1925 年 6 月に『改造』に掲載され、これに「雑信一束」を付して、『支那遊記』という題で同年 11 月 3 日に改造社から出版された。本論文は連載された短編ではなく、1925 年の初版本『支那遊記』(改造社)からの引用に基づく。

<sup>5</sup> 村松定孝、紅野敏郎、吉田瀧生編『近代日本文学における中国像』、有斐閣、1975 年、92 頁。

<sup>6</sup> 陳孜君「谷崎潤一郎と芥川龍之介による『支那』の表象——紀行文を中心に」、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』、第 52 号、2003 年、219 頁。

<sup>3</sup> 前田愛『テキストのユートピア』、筑摩書房、1990 年。

<sup>4</sup> 芥川龍之介の『支那遊記』は「上海遊記」、「江南遊記」、「長江遊記」、「北京日記抄」および「雑信一束」の五部から成るもので、1921 年 3 月中旬から 7 月下旬まで大阪毎日新聞社の海外視察員としての中国行きの体験について書かれたものである。「上海遊記」(全 21 回)は同年 8

「自分の立場に無自覚的に甘んじることなく、他者の鏡に映る自分像を直視し、またそれを読者に伝える意識が『支那游記』では働いている」<sup>7</sup>と分析している。さらに、「自分」（日本）と「他者」（中国）の間に境界線を引きながらも、芥川の中国批判を「帝国日本の膨張主義」と捉えない研究者もいる。たとえば祝振媛によれば「当時の上海とくらべれば田舎だった東京と大阪の閉鎖的で安定した生活に慣れていた芥川龍之介が、上海の土地に踏み入って『第一瞥』をただけで、その大上海のあまりにも刺激の多い生活内容とさまざまな人々に演出されている社会相に肝を潰されてしまった。これは主に彼の見知らぬ物事に対する深い恐怖心と不潔に対する過剰な反応に顕われている」。祝は、当時の歴史の具体的分析を欠いたやや強引な主張を展開しており、「中国の貧困、遅れの『醜』を多く網羅して、それを興味深く嘲けったり、諷刺したりしている」芥川の「狭い民族優越感と中国に対する差別意識」<sup>8</sup>を猛烈に批判するのである。陳攻君、秦剛、祝振媛に代表されるこれらの評価は、中国の研究者が『支那游記』を考察する場合の代表的な実例である。約言するなら、彼らは『支那游記』のなかで描写された中国の「風物、雰囲気、名所旧跡」はけっして愉快なものではないとまず指摘し、それを芥川の差別意識あるいは帝国の国民意識につなげて論じるというパターンをとっている。『支那游記』のなかで例外的に芥川が称賛している、北京の存在に着目する研究者もいるが、その場合も「北京＝昔の中国・日本」という視座をとって、芥川の「支那趣味」に結びつけるものが大半である。それ以外には、たとえば王書瑋が、芥川の中国に行く前の人間関係や女性関係から論を展開し、「もし、中国旅行前の芥川が、日本近代生活に倦怠感を感じなければ、はたして

彼は、北京をこんなに気に入ったのであろうか」<sup>9</sup>と疑問をなげかけている。しかし、管見では、いささか残念ながら彼女の論はあくまでも個人的推測という範囲を越えられていない。

日本の側に目を転じるなら、関口安義のように、まず芥川の中国古典への関心を強調し、「中国の貧困、遅れの『醜』を多く網羅」したのは、彼が「この国に関心を持ち、この国の民衆に眼を注ぐが故の苦言」<sup>10</sup>なのだと弁護する研究者がいる。また、具体的な箇所分析を避けて、『支那游記』の芥川文学における位置や、中国旅行が芥川の作家としての人生に与えた影響などをマクロなレベルで語るものも少なくない。たとえば宇野浩二は、「中国旅行が、芥川に肉体的なダメージを与えただけでなく、『芸術の道の邪魔におちいる本』になった、つまり芥川を芥川らしくない、正しくない方向に引き摺っていったしまったもの、そして芥川を破滅に追い込んだ元凶がこの旅行だと断じている」<sup>11</sup>。また、早期の芥川文学におけるエキゾチズムに比べれば『支那游記』は「やせた、つまらない旅行記」だと断言する川本三郎たちの仕事を契機として、井上洋子のように、大正八年から十年頃の芥川の「支那趣味」を思い出しながら、『支那游記』のテキストを通じて芥川の「支那趣味」の変貌を研究するひとびとも出てきた<sup>12</sup>。このように芥川の「支那趣味」にかんする批評は、中国側の研究もふくめ<sup>13</sup>、結論はそれぞれだが、いずれも

<sup>7</sup> 秦剛『『支那游記』——日本へのまなざし』、『国文学解釈と鑑賞』、第72巻9号、2007年、180-181頁。

<sup>8</sup> 祝振媛『『支那游記』』、『国文学 解釈と鑑賞』、第64巻11号、1999年、116-119頁。

<sup>9</sup> 王書瑋「芥川が中国旅行に求めたもの——『北京日記抄』」、『千葉大学社会文化科学研究』、第11号、2005年、34頁。

<sup>10</sup> 関口安義『特派員芥川龍之介——中国でなにを視たのか』、毎日新聞社、1997年、136頁。

<sup>11</sup> 青柳達雄「李人傑について：芥川龍之介『支那游記』中の人物」、『国文学 言語と文芸』、第103号、1988年、91頁。

<sup>12</sup> 井上洋子「芥川龍之介の中国旅行と〈支那趣味〉の変容：（その一）中国到着まで」、『福岡国際大学紀要』、第3号、2000年、85-92頁。

<sup>13</sup> 例えば單援朝の「芥川龍之介『支那游記』の世界——夢想と現実との間」、『国語と国文学』、1991年9月号）や秦剛の「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象：〈支那趣味〉言説を批判する『支那游記』」、『国語と国文学』、2007

作家論の次元から脱出しておらず、結局は芥川という作家の中国に対する好き嫌いを論証するところで終わってしまう。『支那遊記』に言及する数少ない英語の文献にも同様の事情があり、「芥川龍之介」という大作家の紋切り型を頭に置きながら『支那遊記』を読んでいるものが多い。たとえばジョシュア・A・フォーゲルは、あえて『支那遊記』に登場した三人の中国知識人と芥川の対話に焦点を絞って議論をし、ほかの部分については出版社や読者の要請からそう書かざるを得なかった可能性もあるとしか述べていない<sup>14</sup>。

換言すれば『支那遊記』にかんする先行研究には、中国側の研究には帝国主義批判あるいは芥川批判が多く<sup>15</sup>、日本側（英語圏も同じことが言える）の研究には、——小澤保博の「芥川龍之介『支那遊記』研究」<sup>16</sup>のような考証学的な研究もあるが——「芥川龍之介」という名前に傷をつけたくないとする保守的な読み方が多い。あえて言えば、いずれも「先入観」に呪縛された捉え方であり、結論がテキスト分析に先立っている。したがって、当時の極めて複雑な歴史的背景には十分な注意が払われていない。つまり「作家である芥川」の観念上の「支那趣味」ではなく、「旅行者である芥川」

の身体と向き合うものが、極めて少ないのである。植民地主義によって拓かれた航路がたちまち近代ツーリズムの道となり、オリエンタリズム的イデオロギーの近代社会において旅行が「西欧近代」の国民国家意識の産物として作用してきたことは間違いない。しかし、そうした結論は旅行という体験に先立って導きうるものではなく、後から結びつけられる一種の歴史叙述にすぎない。重層的な表象を含む旅行という体験を、帝国主義や植民地主義という歴史叙述を検証するための足がかりとして用いるのは、本末転倒ではないだろうか。

本稿では、1920年代の中国の半植民地的状況を無視して芥川の身体を一つの中立的な空間として語ることはできないという立場をとっている。むしろ当時の西欧列強や日本、そして中国の間の力関係のなかではじめて、芥川の言語表現や目線、性的焦慮や解放が描けると考えている。中心的な問いとなるのは、以下の四点である。第一に、1921年3月30日の上海に上陸した後の芥川と、同年7月20日に帰国する前の芥川は、同じ「自分」だったのかという問題である。大部分の先行研究では、中国旅行前と後で芥川の変貌が指摘されているが、はたして、中国旅行中の四ヶ月を一つの全体性（totality）として捉えることは妥当なのだろうか。芥川は、四ヶ月の間に上海、蘇州、杭州、楊州、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津など、中国の華北・華東地区を中心に、主要都市を遍歴した。中国旅行の前後で芥川の変貌を論じる方法は効果的であろうが、その際に芥川の変貌はいつ、どこで、どのように発生し、どこまで続いたのかという点を考察することもまた不可欠である。第二に、芥川における「人種」という概念の内面化について注目したい。先行研究では「近代中国に対する差別意識」が芥川にあったか否かが議論の焦点の一つになっている。しかし、それ以前に考えなければならないのは、この中国旅行が生涯で唯一の海外体験だった芥川において、「人種」という抽象的な概念がいかにか皮膚感覚として

年11月号) などがある。

<sup>14</sup> Joshua A. Fogel, "Japanese Literary Travelers in Prewar China," in *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 49, No. 2 (Dec., 1989), 575-602.

<sup>15</sup> むろん、『支那遊記』を称賛するような研究も中国側にある。例えば2006年に北京十月文芸出版社が出版した『支那遊記』の中国語訳『中国遊記』のなかで、訳者の陳生保は、細部にたいするいくつかの異議を除けば「この作品にたいして私は基本的に肯定したいと思う」(15頁)と述べている。その理由として次のことが挙げられている。「第一に、この本は比較的に高い歴史的価値を持っているからである。第二に、中国を愛し、中国人民を同情する気持ちが芥川にあったからである。第三に、中国事情を知るには興味深いもので、可読性の高い作品だからである。」(15-21頁、拙訳)

<sup>16</sup> 小澤保博「芥川龍之介『支那遊記』研究(上)」、「琉球大学教育学部紀要」、第75集(2009年8月)；「芥川龍之介『支那遊記』研究(中)」、「琉球大学教育学部紀要」、第77集(2010年8月)；「芥川龍之介『支那遊記』研究(下)」、「琉球大学教育学部紀要」、第78集(2011年2月)。

構築しなおされたのか、なぜ人種を区別する必要性が彼の身体に迫ってきたのかといった問題である。第三に、芥川にとっての「西洋」とはどのようなものであったかという問題についてみておこう。芥川の「西洋嫌悪」は『支那遊記』で明らかになり、その点は先行研究でもしばしば取りあげられている。しかし、それをただ単に人種主義の範疇のみで論じることが可能だろうか。もしそうでないとしたら、「西欧嫌悪」に作動しているメカニズムとして、他にどういったものが考えられるのだろうか。そもそも、芥川にとって「西洋」とは何であろうか。アメリカ、イギリス、そしてロシアに対してそれぞれ違う態度を見せた彼の内面を、「西洋嫌悪」という一語に回収してよかったのだろうか。そして第四に、当時の日本における『支那遊記』の記号論的意味について考察する。芥川の中国旅行が彼の文学と生活に多大な影響を及ぼしたという主張はすでになされているが、では、軍閥同士が争いあう中国から日本へと帰ってきた彼の身体と『支那遊記』というテキストは、当時の日本人読者や作家にとってはどのような記号的意味をもったのだろうか。以上の問題意識から、本稿では作家論にとどまらないミクロなレベルでこの紀行文を読むことを試みたい。

## 1. 「黄色い顔」：言語のポリティクス

芥川が中国を旅した 1921 年という年は、中国にとっては激動の一年だった。5 月には孫文の広東政府が成立し、7 月には中国共産党が誕生、第 1 回全国代表大会が開催された。中国は、1841 年にイギリスによって開港を強いられて以来、列強進出<sup>17</sup>に苦しんでいた。日本との間でも、1894 年の日清戦争に敗北し、それまで清国に属していた台湾が日本に奪われた。続く 1904 年の日露戦争でも

日本が勝利し、ロシア領であった旅順・大連の租借権と長春以南の鉄道及びその付属権利が日本側へ譲渡された上に、日本の朝鮮に対する指導権も認められた。さらに、第一次世界大戦中の 1915 年には、日本は中華民国の皇帝になることを図っていた袁世凱政権に対し二十一箇条の要求を提出し、満州及び沿岸都市の鉄道敷設権や開発権、布教権などを求め、日本の支持を望んでいた袁はこれを承諾した。1919 年には、列強がパリにおいてヴェルサイユ条約を結び、第一次世界大戦の敗戦国であるドイツ帝国が持っていた在華利益を日本に譲渡した。しかし、中国政府がそれを受け入れようとしたことが発端となって五四運動が巻き起こり、反日の大義を掲げた反帝国主義の大衆的運動が中国全土に広がったのであった。芥川が中国を訪れた 1921 年は、中国共産党の誕生が当時の大衆運動に希望をもたらしていた一方で、五四運動後も列強の侵略が激しくなり、それと同時に軍閥による内戦が激化していた時代であった。中国は、未来がまったく見えないような暗黒の時代に陥っていたと言えるだろう。一方、1921 年の日本は、アジア諸国への侵略を進めつつ、国内では第一次世界大戦後の国内民族産業の拡大などによって女性の出稼ぎ率が向上し、家族形態の変化や日本社会の都市化と近代化の兆しが見え始めていた時期にあたり、デモクラシーに加えて「モダニズム」や「モダニティ」の言説が盛んとなっていた。

そのような年に芥川龍之介は中国へ旅立ったのである。上海に着いた翌日、芥川は病気で倒れ、乾性肋膜炎<sup>18</sup>でそのまま三週間ほど入院する。秦剛は、芥川の上海へ向かう船のなかでの船酔いと

<sup>17</sup> 関口安義『特派員芥川龍之介——中国でなにを視たのか』、毎日新聞社、1997 年、45 頁。「進出」という言葉使いは侵略の事実を不可視化する恐れがあるので、私は使いたくないのだが、ここでは関口の用語をそのまま引用することにした。

<sup>18</sup> 肋膜炎は呼吸器の病気の一つである。もっとも多い原因は結核だが、そのほか、肺炎を起こすような細菌、ウイルス、マイコプラズマ、真菌（カビなどの種類）なども原因になるという。乾性肋膜炎とは、結核菌による肋膜部の炎症疾患のうち、肋膜腔に浸出液が貯留しない疾患のことである（三省堂『大辞林 第三版』）。つまり芥川が上海で罹った病名に、環境の「汚さ」と「臭さ」はすでに示唆されている。この点については後でまた詳しく述べたいと思う。

上陸後の身体の不調は、「表象のレベルにおいては、中国という大いなる対象に向き合う主体の、拠り所のない内面的虚脱感の比喩的な表現として読むことができる」と指摘している。さらに秦は、「しかも、その虚脱感の描出を通じて、視察旅行に出る視察者自身のナショナル・アイデンティティが対象化されたのが、なおさら重要である」<sup>19</sup>と強調し、芥川が「中国」と「西洋」という二つの他者に出会ったことによって、自らの「ナショナル・アイデンティティ」をいかに客体化して捉え、批判するのかというところに焦点を合わせている。秦の「他者に向き合う時こそ、否応なしにまず自らの立場を強く意識し始める」という論理には間然するところがない。しかし、秦は別の論文のなかでは、「支那趣味」が隆盛していた大正中期（とくに 1918 年、1919 年前後）から大正後期にわたっての歴史に注意を喚起し、『他者』への表象に当っては、読者の欲望を満足させる幻想的な言説は、読者にとって向き合いづらい現実的な言説よりも、感化力と説得力を持つ<sup>20</sup>と示唆している。つまり、芥川は中国旅行よりもずっと前から「他者」の中国に向き合っていたというのである。それが正しいならば、その「他者」はなぜ、旅行と同じしかたで芥川が「自分」を客体化することにはつながらなかったのだろうか。知識として存在する「他者」と、実際に出会った「他者」とは、どのように区別すればよいのだろうか。

これらの理由から、芥川の中国旅行を「他者」と「自分」という二元論で大雑把に解釈するだけでは不十分であるように思われる。大阪毎日新聞社の特派員として中国への「視察旅行」に出た芥川の「対象化された」と言われる「ナショナル・アイデンティティ」は、「中国という大いなる対象」と同じように、中国旅行前まではあくまでもイデ

オロギー的な観念であったが、それが身体化あるいは実体化されていった過程について、秦剛は考察していない。しかし、その過程こそが肝心であるのだ。

では、まず人種という概念を芥川がいかに身体化していったのかを見てみよう。

秦剛の「他者」論の底にあるのは、人種という概念の、つまり差異 (difference) の強調である。「人種」は、(自分と他者との間の) 差異をあらわすために発明された概念だとロバード・ヤングは主張している<sup>21</sup>。上海に上陸した芥川は、自分の日常性から脱出し、非日常的な空間へと境界線を踏み越えたのだから、自分と周囲の中国人の差異に目が向くのは自然なことである。しかし、それが人種として表現されたのは、たんに彼の「狭い民族優越感と中国に対する差別意識」があったからだとして説明して済むことではない。1921 年 3 月 30 日、上海に上陸するやいなや、芥川は上海の「世界的群衆」に視線を向けた。そしてその夜、国際通信社で働いているイギリス人の「ジョオンズ君」といっしょに四馬路（上海公共租界）にあるシェツファード (Shepherd, 「羊飼」<sup>22</sup>) という料理屋に食事に行く場面がある。

此處は壁でも食卓でも、一と通り愉快に出来上つてゐる。給仕は悉支那人だが、隣近所の客の中には、一人も黄色い顔は見えない。料理も郵船會社の船に比べると、三割方は確に上等である、私は多少ジョオンズ君を相手に、イエスとかノオとか英語をしゃべるのが、愉快的なやうな心もちになつた。

ジョオンズ君は悠悠と、南京米のカリイを平げながら、いろいろ別後の話をした。その中の一つにこんな話がある。何でも或晩ジョオンズ

<sup>19</sup> 秦剛『支那遊記』——日本へのまなざし」、前掲、182 頁。

<sup>20</sup> 秦剛「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象——〈支那趣味〉言説を批判する『支那遊記』、『国語と国文学』、第 83 巻 11 号、2006 年、59 頁。

<sup>21</sup> Robert Young, *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race* (London and New York: Routledge, 1995), 49.

<sup>22</sup> 『芥川龍之介全集 第八巻』注解、岩波書店、1996 年、304 頁。

君が、——やつぱり君附けにしてゐたのぢや、何か友だちらしい心もちがしない。彼は前後五年間、日本に住んでゐた英吉利人である。私はその五年間、(一度喧嘩をした事はあるが)始終彼と親しくしてゐた。一しよに歌舞伎座の立ち見をした事もある。鎌倉の海を泳いだ事もある。殆夜中上野の茶屋に、盃盤狼藉としてゐた事もある。その時彼は久米正雄の一張羅の袴をはいた儘、いきなり其處の池へ飛込んだりした。その彼を君などと奉つてゐちや、誰よりも彼にすまないかも知れない。次手にもう一つ断つて置くが、私が彼と親しいのは、彼の日本語が達者だからである。私の英語がうまいからぢやない。——何でも或晩そのジョオンズが、何處かのカツエへ酒を飲みに行つたら、日本の給仕女がたつた一人、ぼんやり椅子に腰をかけてゐた。彼は日頃口癖のやうに支那は彼の道楽だが日本は彼の情熱だと呼號してゐる男である。殊に當時は上海へ引越し立てだつたさうだから、餘計日本の思ひ出が懐かしかつたのに違ひない。彼は日本語を使ひながら、すぐにその給仕へ話しかけた。「何時上海へ来ましたか?」「昨日来たばかりでございます。」「ぢや日本へ帰りたくはありませんか?」給仕は彼にかう云はれると、急に涙ぐんだ聲を出した。「歸りたいわ。」ジョオンズは英語をしゃべる合ひ間に、この「歸りたいわ」を繰り返した。さうしてにやにや笑ひ出した。「僕もさう云はれた時には、Awfully sentimental になつたつけ。」(『支那游記』1925年初版、10-12頁、傍点引用者)

芥川は、「ジョオンズ君」といっしよにレストランに入った。彼の目に入った店の光景には、「壁」と「食卓」などの装飾のほか、異なる肌色の人々も含まれていた。しかし、「愉快に出来上がっている」お店の内装に比べると、彼の目に映った違う肌色をしている人群れのことはそれほど直観的に愉快なものではなかったらしい。そしてその人

群れは直ちに「給仕」と「客」との二種類に分けられた。つまり「給仕」はみんな「支那人」だが、「客の中」には「黄色い顔」は一人もいないと、彼はすぐに分類した。つまりここでは肌色＝人種の問題が社会的身分につながられていて、それらはまたその場にいる人々のアイデンティティを構成する二つの要素とされているのだ。

カメラのような目線で物事を客観的に観察しているつもりであつた自分が、まもなくその光景の外には居られなくなったことに、芥川はレストランのなかを眺めながら気がついたのである。その場にいる唯一の「黄色い顔」ではなかったが、「客の中」では唯一の「黄色い顔」だったらしい。言い換えるなら、「客の中」の一人でありながら「給仕」と同じ「黄色い顔」をしている。芥川は、「給仕は悉支那人だが、隣近所の客の中には、一人も黄色い顔は見えない」という、そこにある秩序を混乱させる「黄色い顔」を持っている自分の特殊さに気が付き、そしてその特殊さを、「支那人」の「黄色い顔」と混同されてしまわないように、積極的に周りに示そうとしたのだ。彼は、「イエスとかノオとか英語をしゃべる」ことで、自分の社会的身分を明らかにすると同時に、肌色＝人種の違いで「西洋人」と「支那人」を区別しながらも「西洋人」と「日本人」の区別は抹殺しようとする矛盾した態度を見せている。それにもかかわらず、芥川は「ジョオンズ君を相手に」片言の英語を話して、自分の新しい環境における位置を確認し、それでやっと「愉快的なような心もちになった」というのだ。

イギリスをはじめとする西欧列強に占領された租界時代の上海においては、「英語をしゃべる」ことによって、話者が属する社会的階層や身分が微妙に変わるのとは予想できる。しかし、ここでとりわけ興味深いのは、芥川がただ単に英語を話していたことではなく、「ジョオンズ君を相手に」英語を話していたことである。「ジョオンズ君」は、「前後五年間日本に住んでゐた英吉利人」であつて、

「日本語が達者」の人である。芥川が打ち明けたように、日本で親しくなり、さまざまなことに付き合うようになったのは自分の英語がうまいからではなく、「ジョオンズ君」の日本語が上手だからだ。二人は日本にいた頃は主に日本語で会話をしていたと推定してよいだろう。それならば、上海に来たとたん、いきなり二人とも話す言葉を、芥川のあまり得意でない英語に切り替えたのはなぜだろう。日本のことを「彼の情熱」だと思っている、「一張羅の袴をはい」ていた「ジョオンズ君」が白人の「客の中」では英語に切り替えたこと、あるいは「僕もそう云われた時には、Awfully sentimentalになつたつけ」という一言に見られるように日本語に英語を混ぜたことは、「情熱」の反対にあたる理性というものを取り戻したとも言えるだろうか。いずれにせよ、「ジョオンズ君」が、日本にいるときとは違い、日本との親密関係をこの時には求めていなかったことは、彼が英語を優位な言語にしたところからわかるだろう。当時の白人居留民にとっては、英語以外の言語をしゃべることは、地元の社会に妥協する、つまり自分の社会的階層が落ちてしまうことを意味したのだ<sup>23</sup>。他方、芥川があえて自分の得意でもない英語を使っていたことや、「ジョオンズ君」のことを「やっぱり君附けにしていたのじゃ、何だか友だちらしい心もちがしない」のだから「ジョオンズ」と呼び捨てたことなどは、彼のほうから繰り返し自分の「ジョオンズ」との親密関係を確認していたからだと言っていい。いや、そればかりでなく、「イエスとかノオとか」程度の英語を使って、かなり受け身的に「ジョオンズ」の会話の相手をさせてもらっている時点で、芥川が求めていた「ジョオンズ」との親密関係は、けっして平等なものではないのだ。

芥川が言う「西洋」は、アメリカであり、イギ

リスであり、ロシアでもあった<sup>24</sup>。それはすなわち、地理学で言うヨーロッパ大陸のことだけをさすのではない。「西洋人」はとにかく「黄色い顔」でない人のことを指している。それゆえ「西洋」と発話される瞬間に、いわゆるヨーロッパというニュートラルな意味ではなく、人種差別の相における「白人の世界」という言外の意味が強調されるのである。しかし、芥川はあらゆる「西洋人」に対して必ず同じ態度を取っていたわけではない。イギリス人にたいしては前述のように、親密関係を求めていた。また『上海游記』の最初に登場したアメリカ人は、上海行きの船で「あんなしげに遇つても、泰然自若としてゐる」（傍点ママ）唯一の乗客として芥川を大いに驚かせ、あれは「人間以上の離れ業である」と感心させた。この時の芥川は、アメリカ人のことを「或はあの亜米利加人も、體格検査をやつて見たら、齒が三十九枚あるとか、小さな尻尾が生えてゐるとか、意外な事實が見つかるかも知れない」というふう「空想を逞しくした」（『支那游記』、6頁）のだが、しばらく中国に滞在するとアメリカ人のことを「ヤンキイ」と呼び始めた。一方、ロシア人については、最初から「支那人」の乞食と同列化し、嫌がっていたのだ。「その上この頃ではシベリア邊から、男女とも怪しい西洋人が、大勢此處へ来てゐるやうです。私も一度友だちと一しょに、パブリック・ガアドンを歩いてゐた時、身なりの悪い露西亜人に、しつこく金をねだられました。あれなぞは唯の乞食でせうが、餘り氣味の好いものぢやありません」（『支那游記』、55-56頁）と芥川は述べており、ロシア人のことを上海の「罪惡」の一つとして『支那游記』の読者に向かって語っている。1917年のロシア革命によりロシア帝国が崩壊した後、ロシア国外に脱出あるいは亡命した大量の非ソヴィエト系旧ロシア帝国国民（いわゆる白系ロシア人。ウクライナ人、白ロシア人、セルビア

<sup>23</sup> 熊月之、馬学強、晏可佳編『上海の外国人』、上海古籍出版社、2003年、66頁。

<sup>24</sup> 吉田精一、中村真一郎、芥川比呂志編『芥川龍之介全集 第五巻』、岩波書店、1977年、38頁。



人、ポーランド人、チェコ人、ルーマニア人などのスラブ系民族、またロシアに居住していたユダヤ人、タタール人などが含まれる）が中ソ国境を經由して中国の東北地区から中国の各地や朝鮮半島に亡命していた。アジアでは、ハルビンが白系ロシア人のセンターとして機能し<sup>25</sup>、中国に亡命した白系ロシア人の総人口は20万から25万に達していたという<sup>26</sup>。そのうち、上海に入ってきた白系ロシア人は、たとえば1922年から1923年の間に船で上陸した難民だけでも、3000人以上に及んだのである。そうした難民は、大陸から流れてきた人たちとともに、赤貧を極めたうえに言葉も通じないため、もっとも辛い仕事に就くか、乞食になるかしか選択肢がなかった。後になって、たとえば1925年の五・三〇事件などでは、上海の白系ロシア人が列強に買収され、租界における列強の利益を守る重要な軍事力、つまり帝国主義の共犯者になったが、1921年時点では彼らはまだ散在する都市貧民であった。その惨めな境遇を、芥川は上海で目撃したのである。

ところで、芥川がここで表明しているロシア人嫌悪にはより深い歴史的背景があり、そこには19世紀末以来のアメリカやイギリスとの関係も反映されている。1894年の日清戦争以来、日本とロシアは満州での利益を奪い合い、それによってそれぞれのヨーロッパ列強との関係も変わりつつあった。例えば飯倉章の『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説』によると、「(一八九四年の)四月に結ばれた下関講和条約で、日本は清国から遼東半島の割譲を認められた。しかし、条約の内容が公になるやいなや、ロシアを中心に、ドイツ、フランスを加えた三国がこの割譲に異議を唱え、武力を背景に共同通牒を突き付けて、遼

東半島の清国への返還を勧告した。日本政府は、やむなく勧告に従った」<sup>27</sup>。そして、「日清戦争後、朝鮮への支配を確実なものとしようとしていた日本にとって、最大の脅威は、遼東半島を租借し、中国東北部に進出していたロシアであった」<sup>28</sup>のだ。当時日本政府内は、ロシアとの争いを避けて協調の道を探ろうとする日露協商派と、イギリスとの同盟によりロシアを牽制しようとする日英同盟論者とに分かれていた。結果的には、1902年に日本とイギリスの間に軍事同盟が結ばれ、それが1905年と1911年に続盟された。1918年から1922年までの間に、連合国（大日本帝国・イギリス帝国・アメリカ合衆国・フランス・イタリアなど）がロシアの革命政権を打倒することを意図して、シベリアに出兵した。日本とソ連の敵対関係や、日本と西欧列強の微妙な同盟関係<sup>29</sup>がこれでさらに明白となった。

そういう状況の下で芥川は、ドイツにいる森鷗外やイギリスにいる夏目漱石とは違い、同じ「黄色い顔」の国にいらながらも、あるいは同じ「黄色い顔」の国にいるからこそ、人種の差異を区分する必要、あるいは区分しないことで生ずる危険をはじめて身体で感じたのであった。日本を離れた芥川は、中国人と同一視される可能性を感じて、はじめて不安になった。だから同じ「黄色い顔」の彼は、日露戦争の最中に渡欧して「黄禍論」にたいする反論をイギリスで演説した末松謙澄のように、自分が（西洋の基準で）文明的になったこと、日本は近代化しても西洋にはついて行くこと、そして日本は中国とは違うことを、周りの「西洋人」の前で一生懸命表明していた。「日本の国民は、たとえそうしようとしても、彼らの皮膚の色合いを変えることができませんし、またわが国は、も

<sup>25</sup> 目黒強「谷崎潤一郎『細雪』にみる接触空間におけるモダンガール表象のアポリア」、『一九三〇年代と接触空間——ディアスポラの思想と文学』、緒形康編、双文社出版、2008年、19頁。

<sup>26</sup> 王俊彦『白俄中国大逃亡記実』、中国文史出版社、2001年、7頁。

<sup>27</sup> 飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説』、彩流社、2004年、52頁。

<sup>28</sup> 飯倉章、前掲書、92頁。

<sup>29</sup> 1921年には米日仏英の四カ国条約が締結されたため日英同盟廃止が決まり、そこから日英・日米関係が空洞化していき、しだいに対決の道に踏み込んだのだ。

し全力を尽くした後も、単に色の理由だけでもって追放されるべきものでありますならば、それを、自分が西洋諸国の騎士道や啓蒙主義から期待する権利を持っているとするところのものをはるかに越えた、冷酷な仕打ちと考えなければならぬでしょう」<sup>30</sup>——このようにイギリス人の前で力説する末松の言葉まで口にするのはたしかになかったのだが、それはまさしく上海のシェツフアアドという料理屋で「ジョオンズ君を相手に」イエスとかノオとか片言の英語をしゃべろうとがんばっているときの芥川龍之介の心理だったのではなからうか。1885年に福沢諭吉が「脱亞論」を発表してから約35年間にわたって、日本人は近代化と西洋化にどんなに成功しても、まだ「黄色い顔」の呪いから脱出できていなかったのである。

一方、上陸したての芥川は「ジョオンズ」といっしょに馬車に乗ったら、完全に宗主国イギリスの代理にでもなったつもりになり、自分が乗っている「馬車の路を譲ってくれる」ように「印度人の巡査」が「交通整理」の役を働いてくれると、これもまた「愉快的心もちになった」と述べている。

アスファルトの大道には、西洋人や支那人が氣忙しさに歩いてゐる。が、その世界的な群衆は、赤いタバアンをまきつけた印度人の巡査が相圖をすると、ちゃんと馬車の路を譲ってくれる。交通整理の行き届いてゐる事は、いくら最眞眼に見た所が、到底東京や大阪なぞの日本の都會の及ぶ所ぢやない。車屋や馬車の勇猛なのに、聊恐れをなしてゐた私は、かう云ふ晴れ晴れした景色を見てゐる内に、だんだん愉快的心もちになった。(『支那遊記』、8頁)

当時上海の各租界では「印度人の巡査」を、秩序を維持するための警察官として何人か置くのが

普通であった。とくにインド人とイギリス人との関係は、上海でも「使用人」と「マスター」のようなものだったという<sup>31</sup>。そもそも上海のイギリス租界は、その「各租界」のなかでもとりわけ勢力が強かった。1845年にイギリスが中国ではじめての租界を上海に創設し、それが租界内イギリス人の自治行政権掌握の先例を築いた。当時の状況を説明した文献によれば、「1850年に太平天国の乱が発生し、53年に上海も小刀会の乱の渦中に巻き込まれると生命財産の安全を求める外国人居留民は自衛・団結意識を高揚させ、イギリス領事オールコックの主導で1854年に第二次土地章程を公布し、決議機関としての納税人会議と執行機関としての参事会、そして参事会の下で租界の行政事務を担当する工部局が設置された」という<sup>32</sup>。こうして、上海のイギリス租界をはじめ、外国人の居住貿易権の確保という経済的意義が本質であった中国の各租界は、本来属人主義的な領事裁判権や外国軍隊の駐留によってその性格が複雑になり、列強の中国侵略の政治的拠点になった。しかし、租界とは特定国の外国人のためにつくられた、その母国の都市の「縮小版」であるはずだが、上海の租界においては中国人の居住が禁じられることはなかった。なるほど、創設当初は「華洋分居」を基本とはしていたが、太平天国の乱で多数の難民が流入すると、租界当局は「華洋雜居」を認め、租界内の「中国化」が顕著に進展した。それゆえ、租界の治安維持部隊は、帝国主義と植民地主義のグローバルなネットワークの一部として、その構成も、白人の警察長官の下にインド人、白系ロシア人、中国人などが混合した極めて複雑なものになったのである。とくにインド人は、アヘン戦争後香港の治安維持の役割を担わされるようになるが、それ以降、イギリスの中国における勢力範囲

<sup>31</sup> Robert Bickers and Christian Henriot ed. *New Frontiers: Imperialism's New Communities in East Asia, 1842-1953* (Manchester University Press, 2000), 70.

<sup>32</sup> 高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』、研文出版、2009年、8頁。

<sup>30</sup> 松村正義『ポーツマスへの道——黄禍論とヨーロッパの末松謙澄』、原書房、1987年、195頁。

では警察の役を務めさせられ、上海でもイギリス政府だけでなく複数の列強によって租界の治安のために雇われていた<sup>33</sup>。

だが、専管租界を持っていたイギリスとは違って、日本は専管租界を持っていなかった。前にもふれたように、日清戦争後には、日本が中国東北部で獲得した利益はロシア、ドイツ、フランスの三国の干渉により返還させられ、また、1899年に上海共同租界が第四回の拡張を行った際には日本は専管租界の設定を要求したが、希望した地域は共同租界拡張区域に包含されたため、結局他の外国人と共通の、共同租界における居住貿易の利益のみを享受することになったのだ。換言すれば、「欧米人が行政権を掌握する上海租界への後からの参入者であったため上海租界の周縁者的な」<sup>34</sup>地位を「新参者」の日本が強いられていた。しかし、第一次世界大戦でドイツが敗北し、ドイツの在华利益は日本が継承した。日本からの居留民数は、第一次大戦までは絶対的に優位を占めたイギリスの上海居留民人口をはるかに凌駕し、上海租界における条約国民中で首位を占めるようになった。そのため日本人はイギリス人中心の租界行政に不満を持ち始めた。こうして上海の日本人居留民は、高綱博文が指摘したように、「優越感と劣等感、先進意識と後進意識、支配者意識と被害者意識が複雑にまじりあう」屈折した『『有色の帝国』意識』を抱くようになったと考えられる<sup>35</sup>。

そんななか上海にやってきた芥川は、埠頭を出て馬車に乗り、元のイギリス租界、フランス租界であった地域を走りながら、未知の「世界的な群衆」のことを心細く眺めていた。「アスファルトの大道に氣忙しさに歩いてゐる」「西洋人」はイギリス人だけではなかったはずだが、そのことにも気がつかなかったろう。上陸したての芥川は、ま

だ上海租界の日常に生きていないため、居留民の複雑にまじり合った意識を身体的に十分には知らなかった。つまり、日本が中国で「有色の帝国」になっているという知識は、上陸したての彼のなかでは身体化されていなかった。だから彼は、旅行の経験として、何よりもまず日本が「有色の帝国」になったという確認をすることになった。そういう意味では、交通整理の役を働いてくれた「印度人の巡査」の存在が「世界的な群衆」よりも肝心であった。それは、馬車に乗って激しく揺れていた芥川の身体を、いわゆる擬似白人という位置につけてくれたのだ。また、つねに部外者と区別がつくように、社会的実践と規範によって作られるファンタジーは、人種のカテゴリーを強めつつ、しかもそれを簡単に超えられる概念にもしている。そのことも身体感覚で受けとった芥川は、それ以後、人種と文化の紋切り型にたいして「反省」もするのである。

## 2. 近代的身体的感受性：衛生とジェンダーの側面

「近代世界システムに適応して急速に近代化をとげ、国民国家として再編していく日本が、周囲の東アジア地域との間で抗争をひきおこし、国際秩序を改変し」<sup>36</sup>ようとした。上海に上陸した芥川は「黄色い顔」が一人も見えない「客」の群れのことを普遍とすると、同じ「客」である自分が特殊にならざるをえないことに気がつき、その特殊さを抹殺しようとしていた。だが、「支那人」の前に来ると、今度は自分を普遍とし、相手の特殊さをどうにかして見出し、相手を特殊のままに固定することで、自分が普遍のままでいられることを望むのだ。ここでは「日本」という普遍に近づく資格は、「ジョオンズ君を相手に」しゃべる英語ではなく、近代の衛生観念を通して入手されている。しかし、芥川の身体によって表された「日本」

<sup>33</sup> Robert Bickers and Christian Henriot ed. *New Frontiers: Imperialism's New Communities in East Asia, 1842-1953*, 59.

<sup>34</sup> 高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』、前掲、14頁。

<sup>35</sup> 高綱博文、前掲書、20頁。

<sup>36</sup> 米谷匡史『アジア／日本』、岩波書店、2006年、20頁。

は、彼の言語表現で感じられた「西洋」と同じくジェンダー化された側面を持っているため、両者はけっして同じ普遍にはなれない。

夜のシェツフアアド料理屋に辿り着く前に、上海に着いて埠頭の外へ出たとたんに車屋に囲まれた芥川は、「支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない」と述べている。

抑車屋なる言葉が、日本人に興へる映像は、決して薄ぎたないものぢやない。寧ろその勢の好い所は、何處か江戸前な心もちを起させる位なものである。處が支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸しては、大聲に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人なぞは、少からず不気味に感ずるらしい。現に私なぞも彼等の一人に、外套の袖を引つ張られた時には、思はず背の高いジョオンズ君の後へ、退却しかかつた位である。(『支那游記』、7頁)

日本の車屋より汚いから「不潔それ自身」だと上海埠頭の車屋が厳しく批判されている。しかしここではその「不潔」さは、まずは芥川自身ではなく「上陸したての日本婦人」の心理を通じて強調される。「上陸したての日本婦人」は、「怪しげな人相をしてゐる」車屋の「大聲」に驚き、どこかに潜在している危険と「不潔」さを不気味に予感する。そこで、興味深いことに、芥川本人が上海埠頭という場に登場すると、前の瞬間まで「日本婦人」の不愉快の対象となると言っていた「車屋」に、今度は自分までもが脅かされてしまったのだ。そして、前の瞬間まで「支那の車屋」を勢よく見下ろしていたはずの彼が、今度は「日本婦人」と同じく、誰かに守ってもらわなければならない立場にすりかわって、「思はず背の高いジョオンズ君の後へ、退却しかかつた位」だと、身体

的な反応を示している。つまり「思はず」退却した芥川は、「背の高いジョオンズ君」の理解と保護を求めた。そうすると、埠頭の場面がそれで直ちに「怪しげな人相」の「車屋」と「背の高いジョオンズ君」だけの対決となり、同時に男性であるはずの芥川は「日本婦人」と同じように抽象化され、「ジョオンズ君」の「後へ」消えていくのである。

前に引用したシェツフアアドという料理屋の場面を思い出すと、ジェンダー化された日本と、マスキュリニティ<sup>37</sup>を喪失した芥川のイメージがますます鮮明になるだろう。その場面にも、「日本人」がまったく違うアспектから、女性の弱さと孤独感を通して描かれる部分がある。そこでは、「ジョオンズ」の話に登場した「日本の給仕女」がなぜ上海まで来たのかは説明されていないのだが、日本に「歸りたいわ」と、日本語が話せるイギリス人の前で「涙ぐんだ聲」で訴える。「支那」から誰かに守ってもらわなければならない存在としての「日本」が、この日本人の給仕女として表象されるのである。その「誰か」とは、上海埠頭に現れた「背の高いジョオンズ君」のような日本に対して「情熱」的なイギリス人の男性ほかならない。一方、泣いていた日本人の給仕女の話をも芥川に伝えたときの「ジョオンズ」は、「歸りたいわ」を繰り返して、「にやにや笑」っていた。この日本語の女性言葉を繰り返しながら給仕女のまねをする「ジョオンズ」に対して、「イエスとかノオとか英語」で対応しながら聞いている芥川のイメージを、埠頭での彼の身体的な反応や「日本婦人」のそれと合わせてみると、レストランでジェンダー化された日本の表象が、埠頭で女性化された日本人男性のイメージと合致するのである。

だが、『支那游記』はジェンダー化された「日本」

<sup>37</sup> 字数の制限のためジェンダーとセクシュアリティにかんする概念的論考はここではやめておこう。本論では、「ジェンダー」を文化的性差の意味に、「マスキュリニティ」を男性の性器が表象する、いわゆる「男性性」という意味に単純化して使ってしまう。

と「西洋」を同じ性的役割に固定せずに、これもまた身体のポリティクスにおいてひっくり返すのである。「背の高いジョオンズ君」を前にしてマスキュリティが奪われた芥川は、自分の去勢に気がつき、男根と緊密に繋がる（男性しかできない）「立小便」の話を取り上げ、男性中心の風景を描き始める。そしてその話では、「汚い」「臭い」と指摘される「支那」を「日本」と「西洋」の間に入らせ、嗅覚・視覚と性器との二つの言説において自分の身体の位置を探し直すのである。

たとえば、芥川が退院早々友人の四十起氏といっしょに上海市内を観光して、「噂に聞き及んだ湖心亭」に行ったというエピソードがある。「湖心亭」とは、豫園の九曲橋にある池のことで、今日の上海においても外国人の間では歴史の古い庭園<sup>38</sup>として非常に人気の高い観光地であり、上海の中心地にある重要な文化アイコンの一つである。1921年の湖心亭は修繕前だったとはいえ、やはり「魔術」のあるところだったらしい。

湖心亭と云へば立派らしいが、実は今にも壊れ兼ねない、荒廢を極めた茶館である。その上亭外の池を見ても、まつ蒼な水どろが浮んでゐるから、水の色などは殆見えない。池のまわりには石を疊んだ、これも怪しげな欄干がある。我々が丁度其處へ来た時、浅葱木綿の服を着た、辮子の長い支那人が一人、（中略）悠悠と池へ小便をしてゐた。陳樹藩が叛旗を翻さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英統盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には、問題にならないのに相違ない。少くともこの男の態度や顔には、さうとしか思はれない長閑さがあつた。曇天にそば立つた支那風の亭と、病的な緑色を擴げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆隆たる一條の小便と、——これは憂鬱愛すべき風景畫たるばかりぢやない。同時に又わが老大國の、

辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿に、しみじみと少時眺め入つた。が、生憎四十起氏には、これも感慨に價する程、珍しい景色ぢやなかつたと見える。

「御覧なさい。この敷石に流れてゐるのも、こいつはみんな小便ですぜ。」

四十起氏は苦笑を洩した儘、さつさと池の縁を曲つて行つた。（『支那游記』、22-23 頁）

「汚い」や「臭い」と言っても、実際にその人たちの小便や匂いに直接汚されたわけではないので、「汚い」や「臭い」という言葉はやはり、ここでは自分の権利を守るため相手に向かって口にする受動的な抗議というより、（話者の）社会常識から相手の行為を判断し、それは間違いだと積極的に攻撃をする言葉であろう。小森陽一の「言語と差別」に対する分析に依拠して述べるなら、「その言葉を使っている人々の間における、社会的な規準、宗教的価値観、性差の文化的規準、排泄行為をめぐる習慣、浄と不浄の空間分類、そしてその社会における排除と囲い込みの論理等々、きわめて複綜的な、社会規範の網の目の役割を果たしているのだ」<sup>39</sup>。そして「汚い」「臭い」かそうでないかを規準にし、自分とは「共犯関係」なのか「他者関係」なのかを判断して、差別の暴力を振るうのである。「汚い」「臭い」という話を取りあげる挙措は、野蛮とされる植民地についての紀行文に共通して見られる傾向である。『支那游記』もその一例にすぎない。芥川は、人の前で「悠々と小便をしていた」「支那人」の男を、文明を知った近代人という枠からまずは一個人として排除していく。そしてその「支那人」が中国で断髪が提唱されはじめた1911年あたりから10年近くも経った1921年という時点ではまだ「辮子の長い」ままであったことから、彼はおそらく保守的で反近代化／西洋化の一人で、前近代の「わが老大國」の「支那」

<sup>38</sup> 創設されたのは1559年であり、現在の湖心亭は1926年に修繕された。

<sup>39</sup> 小森陽一『レイシズム』、岩波書店、2006年、46-47頁。

を生きてきて、そしてこれからもそう生きていこうとするような人物だと考える。つまり、安徽派に属し、陝西省の統治権を握っていた軍閥陳樹藩の失脚や、白話詩の流行、第三回日英統盟の話など近代「支那」のことは、彼とはまったく無関係である。そしてその前近代の「支那」を「象徴」する人が、裏小路や道端ではなく、外国の観光客がよく行く近代上海の中心にある有名な池に向かって「悠々と」小便したのは、「西洋」が中国に強い文明や近代性に対し逆らう行為を意味していると理解してよいだろう。ようするにこのような設定のもとで、「辮子の長い支那人」の身体は個人的な存在であることをやめ、前近代の「わが老大国」の「支那」の「象徴」として記号的意味を持ち始める。そして、「支那」は「日本」との共犯関係から排除されていくのである。

そんな「支那」から、芥川は友人の跡を追って橋のむこうに去った。しかしここでは、前田愛が提示した「結合と分割の両義性をはらんだ」橋の「境界性」<sup>40</sup>によっても、浄の「日本」と不浄の「支那」の境界線を身体で感じとることはできなかった。芥川の身体は、その代りに嗅覚の敏感さで上陸したての日本人と、日本を長く離れていた日本人との区別を感じる。彼は「古楊州」という章では次のように例を挙げている。

一番私の辟易したのは、この大溝の臭気である。私はその臭ひを嗅ぎながら、ちつと舟の中に坐つてみると、何だか又肋膜炎のあたりが、かすかに痛みさうな気がして来た。しかし高洲、島津の両先生は、香料の川にでも泛んでゐるやうに、平然と何か話してゐる。私の信ずる所によれば、日本人は支那に住んでゐると第一に嗅覚が鈍るらしい。（『支那遊記』、185-186 頁）

臭気を極めた「この大溝」というと、どうして

も前の引用文に出てきた「この敷石に流れてゐるのも、こいつはみんな小便ですぜ」という湖心亭外の池のことを連想させられる。排泄と呼吸が一つ循環になってしまったこの「小便の池」に泛かんでいながら、「支那に住んでゐる」日本人の高洲（「楊州唯一の日本人」、鹽務官の高洲太吉氏）と島津（上海観光に付き合ってくれた友人の四十起氏のこと）の「両先生」はどのような反応を見せたのだろうか。中国が長くない芥川は、川の臭気を嗅ぐだけでも肋膜炎の持病が起こりそうになるのに、高洲と島津は「嗅覚が鈍」っているので「平然と」何か話しさえしている。肋膜炎は胸膜炎ともいい、肺を二重に包む膜のことを指す。つまり鼻から気管へ、肺へ、そして肋膜炎へという順番で、臭気が身体の表面から内臓まで沁み込んでいって病気を誘発するということになる。芥川は楊州から上海に引き上げると、すぐに病院に肋膜炎の検査に行ったことから見て、おそらくこの「痛み」も気のせいではなかったのだろう。ここでは、嗅覚の鈍さがもたらすのは社会規範や倫理的な次元における不愉快さだけではなく、実際に存在する身体的な危険性でもあるのだ。そして、その臭気の危険性に脅かされる人間は、呼吸している限り、逃げようもない。柳田国男は、色や音の〈進化〉した近代においては嗅覚が退化し、視覚と触覚中心主義のもとに格下げされて位置づけられていたと指摘している。そのような嗅覚に与えられる低い地位をめぐる、坪井秀人は次のように分析を試みている。「崇高が生起する条件は空間の拡がり、あるいは〈無限〉であり、何よりも対象との距離の確保が必須となる。嗅覚や味覚は対象との距離が最も近接した感覚であり、ロマン主義的な崇高の規範からは排除されなければならなかったということだろう」<sup>41</sup>と。坪井が示唆する嗅覚の「対象との距離」の近さは、危険性という観点から考えると、視覚も聴覚も触覚も及ばないほどで、

<sup>40</sup> 前田愛『テキストのユートピア』、前掲、23 頁。

<sup>41</sup> 坪井秀人『感覚の近代——声・身体・表象』、名古屋大学出版会、2006 年、173-174 頁。

味覚に匹敵するレベル、あるいは味覚以上に逃れられない極端な恐ろしさを生みだすものだと言ってもよい。芥川はおそらくその危険と恐怖を感じつつ、「高洲、島津の両先生」の平然とした様子に驚かされたのであろう。

坪井が正確に述べているように、「匂いがパーソナルな対関係の場面やナルシス的な身体領域を逸脱して、広く共有（公有）されると、それは途端におぞましい悪臭として嫌忌されるか、階級や性差を分節する権力の記号として機能しはじめる」<sup>42</sup>。坪井が論じているのは日本近代詩における嗅覚の表象だが、コンテクストが違うとはいえ、近代社会において嗅覚的な分界線が新たにできていたことについては、芥川のテキストにも認められる。ただし、芥川がここで強調するのは、共有され公有される「大溝」の悪臭そのものが示す社会的空間の先進と後進という分節化ではなく、その悪臭を嗅ぐ近代的感覚を持つ身体感受性である。つまり、悪臭にたいする敏感な嗅覚を持っていない身体は、近代的身体だとは見られず、文明から排除されていく。

芥川の中国滞在が長くなると、彼の抱いていた文明的なアメリカ人やイギリス人というイメージも崩れていく。杭州の新々旅館に泊まった夜、芥川が旅館の玄関へ出てみると、アメリカ人の男女五、六人がそこでお酒を飲んで大騒ぎをしていた。それに耐えられず、門の左のほうにある薔薇の棚の下へ行った芥川が、そこで「品の好い支那服の老人」が轎子で担がれている光景を心もちよく眺めている。

しかし結局運命は、私のロマンティズムに残酷だった。この時突然玄関から、ひよろひよろ石段を下りて来たのは、あの禿頭の亜米利加人である。彼は同類に聲をかけられると、妙な手つきをして見せながら、ブラッディ何とか返

答をした。上海の異人はヴェリイの代りに、屢恐る可きブラッディを使ふ。これだけでも既に愉快ぢやない。その上彼は危なさうに、我々の側へ立ち止まるが早いか、玄関へ後を向けたなり、傍若無人にも立小便をした。

ロマンティズムよ、さようならである。私は陶然たる村田君と、人気のないサロンへ引き返した。水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立ちながら。（『支那遊記』、107-108 頁）

「異人」という、明治時代に使われていたヨーロッパ人にたいする呼び方で「禿頭の亜米利加人」を指すところは興味深い。そしてそのアメリカ人は、「ヴェリイ」の代りに「ブラッディ」を口にしていて。周知のように、ブラッディという一語をめぐるもっとも有名な例として、16 世紀のイングランド王・ヘンリー 8 世の宗教改革や、その娘のメアリー 1 世（＝「ブラッディ・メアリー」）が王位を獲得した後父親への復讐としてプロテスタント虐殺を行ったことが挙げられるだろう。「屢恐る可きブラッディを使ふ」という「上海の異人」たちはこうしてイギリスの中世史やその後の植民史を背負いながら、上海の租界で「西洋」諸国の間に働く力関係をも見せているのである。

「禿頭の亜米利加人」の「ブラッディ何とか」に既に腹が立っていた芥川は、その「傍若無人にも立小便をした」姿を見ていると、いくら船の中では彼らの異常な体力に感心し、日本の黄色人種の脅威を説くロシアやドイツの言ったことについて「英米両国は決して此の如き勸説に耳を傾けること能はず」<sup>43</sup>と信じていた日本国民の一人であっても、幻滅する。また、「立小便」が「池へ斜めに注がれた、隆隆たる一条の小便」というような、いかにも男性にしかあり得ない光景である以上、「汚い」や「臭い」という「浄と不浄」の問題だけでは済ませられなくなる。「立小便」が持つ性的暗

<sup>42</sup> 同上、186 頁。

<sup>43</sup> 飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説』、前掲、89 頁。

示は男根 (phallus) であり、公共の場所で立小便をするというのは、男根の非神秘化も意味する。近代化と植民地化は、マスキュリンの「西洋」(ここでは「禿頭の亜米利加人」と、「ブラツディ」に投影されているイギリスによって表象されている) がそれ以外の世界を征服していく過程だと見られるが、そのマスキュリニティは元から公認されたものでも証明できるものでもないような、「西洋」が植民地を占領し統治するためにかろうじて作り上げられた言説なのである。だから、この言説における「西洋」のマスキュリニティの起源や歴史を非神秘化しようとするような行為は、すべて前近代的で非文明的だとされるのも不思議ではないだろう。杭州の旅館でアメリカ人の立小便を目撃すると、芥川は「水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立ちながら」、まず嗅覚、視覚の次で「西洋」のことを「汚い」「臭い」といって「野蠻」の枠に入れ、自分から排除し差別していく。それと同時に、性という次元においては、アメリカ人の立小便によって「西洋人」の性的優位の神話が崩れ、そのことで自分の性の神秘性を保つことができた芥川は、かわりに「西洋」のマスキュリニティを自分の身にまとう。しかし、近代日本の歴史を振り返って見ると、「庶民が所かまわず立小便をすることと、人前で平気で裸体をさらしても恥ずかしがらないということが、明治初期のお雇い外国人から見ると、あまりにはなはだしい野蠻の象徴であり、文明の欠落の象徴だった」ために、「明治5年に、できたばかりの明治新政府は、立小便や人前で裸体になることを禁ずることを中心にした、異様なまでにきまこまかい軽犯罪法を出して、警察による取り締りの対象にしたのである」<sup>44</sup>という時期もあった。文明であったはずがここまで墮落してしまった「西洋」に対して、野蠻から文明に反転した日本は、もはや「共犯関係」を求めることができない。それどころか、近代と

文明を象徴する現在の日本の前では、「西洋」を近代のモデルから「夷」へと位置づけ直し、そして追い払わなければならないというのである。

### 3. 「盲目」の目：反 - 紋切り型

こうして、中華帝国を中心とする「朝貢一冊封」体制と西洋列強を中心とする近代世界システムとの衝突によって転換を始めた東アジアの国際秩序<sup>45</sup>において、芥川は上海で「俗悪」化された西洋を体験し衝撃を受けたのだが、同時に彼は破壊された昔の「支那」を、近代という前近代の廢墟から掘り出そうとした。湖心亭を出たすぐ後に、彼は豫園で乞食を見たのである。

それから少し先へ行くと、盲目の老乞食が坐つてゐた。——一體乞食と云ふものは、ロマンテイツクなものである。ロマンティズムとは何ぞやとは、議論の干ない問題だが、少くともその一特色は、中世紀とか幽霊とか、アフリカとか夢とか女の理窟とか、何時も不可知な何物かに憧れる所が身上らしい。して見れば乞食が会社員より、ロマンテイツクなのは當然である。處が支那の乞食となると、一通りや二通りの不可知ぢやない。雨の降る往来に寝ころんでゐたり、新聞紙の反古しか着てゐなかつたり、石榴のやうに肉の腐つた膝頭をべろべろ舐めてゐたり、——要するに少少恐縮する程、ロマンテイツクに出来上がつてゐる。支那の小説を讀んで見ると、如何なる道楽か神仙が、乞食に化けてゐる話が多い。あれは支那の乞食から、自然に發達したロマンティズムである。日本の乞食では支那のやうに、超自然な不潔さを具へてゐないから、ああ云ふ話は生まれて来ない。まづ精精將軍家の駕籠へ、種ヶ島を打ちかけるとか、山中の茶の湯を御馳走しに、柳里恭を招待するとか、その位の所が關の山である。——あ

<sup>44</sup> 小森陽一『レイシズム』、前掲、90頁。

<sup>45</sup> 米谷匡史『アジア／日本』、前掲、20頁。



まり横道へ反れすぎたが、この盲目の老乞食も、赤脚仙人か鉄拐仙人が、化けてでもぬさうな恰好だった。殊に前の敷石を見ると悲惨な彼の一生が、綺麗に白墨で書き立ててある。字も私に比べるとどうやら多少うまいらしい。私はこんな乞食の代書は、誰がするのだらうと考へた。（『支那游記』、24-25 頁）

ここもやはり「汚い」と「臭い」の話につながるのだが、芥川は「この盲目の老乞食」を紋切り型の乞食のイメージにはめ込みながら叙述することとはしなかった。乞食のステレオタイプを言うと、たとえば石角春之助が『近代日本の乞食』のなかで描いた 1929 年前後に浅草で生活している乞食などは、「醜い不具者程、乞食として働きよく、寧ろ醜悪なる体軀の持ち主を以て、貴しとしています。極く甚だしいものになりますと、故意と顔に泥を塗ったり、元気であるにも拘らず、今にも息を引きとりそうな格好をして、憐れさを見せひらかす者も」<sup>46</sup>ある。芥川が目撃した、「雨の降る往来に寝ころんでいたり、新聞紙の反古しか着ていなかったり、石榴のように肉の腐った膝頭をべろべろ舐めていたり」する「支那の乞食」は、一見すれば石角の描写とは極めて似通ったものであるが、乞食の汚さと臭さはここでは強調されていない。逆に、芥川は乞食の「超自然な不潔さ」から中国の昔話を連想し、そこから一種の文学的「ロマンティズム」と想像力まで見えてきたと述べている。とくに彼の目を引いたのは、「盲目の老乞食」の綺麗な代書だった。盲目の老乞食の「悲惨な一生」は、彼の見えないところで、彼には用いることができない手段を通じて、彼ではない人たちのために、開いている。言い方をかえるならば、綺麗な代書に書かれている「悲惨な彼の一生」は、彼の本当の人生だったかどうかは誰も証明できないのだ。目の見えない身体は、目の見える世界に

おける自分の位置を確認も証明もできないし、逆に目の見える人々は知らない世界が、盲目の身体の中にあるだろう。言い換えれば、盲目の老乞食の身体が、芥川たちの世界にありながら、同時に存在しないのである。この永遠に交渉不可能な二つの世界が同じ身体に生み出されたことを通して、芥川は「赤脚仙人か鉄拐仙人が化けてでもいそう」な話へと空想を展開させ、「汚い」「臭い」あるいは不気味な雰囲気より、中国と日本の神話の奇妙な世界に導いていくのである。「乞食」という民俗的には長い歴史を持つイメージの文学的伝統への繋がりが、同じ「汚い」「臭い」「支那人」が登場する不愉快な場면을「ロマンティック」な奇遇にひっくり返すのである。

「支那」を昔話、あるいは神話の世界に結びつけ、ロマンティズムの表象として描くのは、もちろん別の紋切り型である。しかし「赤脚仙人か鉄拐仙人」を連想した芥川は、「盲目の老乞食」の話が「ロマンティック」になるところでは止まらず、続けて露地の古風な骨董屋を諷刺しながら「骨董を買ふには支那へ行くより、東京日本橋仲通りを徘徊した方が好ささうである」（『支那游記』、26 頁）と述べた。つまり「盲目の老乞食」の身体は、永遠に確認することのできない「赤脚仙人か鉄拐仙人」を連想させる世界と、「東京日本橋仲通り」より劣る「支那」の現実を同時に表象する。それがまた芥川の身体を、〈むかし〉にたいする想像と〈いま〉にたいする批判のはざまに位置づけることになるのだ。

紋切り型について、彼は「江南游記」の冒頭でこう述べている。

杭州行きの汽車へ乗つてゐたら、車掌が切符を調べに来た。この車掌はオリヅ色の洋服に金筋入りの大黒帽をかぶつてゐる。日本の車掌に比べると、何だか敏活な感じがしない。が、勿論さう考へるのは、我々の僻見の祟りである。我々は車掌の風采にさへ、我々の定木を振り廻

<sup>46</sup> 石角春之助『近代日本の乞食』、明石書店、1996 年、12 頁。

しやすい。ジョン・ブルは乙に澄まさなければ、紳士でないと思つてゐる。アンクル・サムは金があれば、紳士でないと思つてゐる。ジャツプは、——少くとも紀行文を草する以上、旅愁の涙を落したり、風景の美に見惚れたり、游子のポオズをつくらなければ、紳士でないと思つてゐる。我我は如何なる場合でも、かう云ふ僻見に捉はれてはならん。——私はこの悠悠とした車掌が、切符を檢べてゐる間に、かう云ふ僻見論を発表した。尤も支那人の車掌を相手に、気焰を揚げた訣ではない。案内役に同行した、村田烏江君に吹きかけたのである。(『支那游記』、92 頁)

杭州行きの汽車の車掌が日本の車掌に比べると「敏活な感じがしない」という「僻見論」的発言をした自分にたいする芥川の反省がどれほど真剣だったのかは疑問だが、中国に上陸した当初に比べれば、たとえそれが半分冗談であっても、芥川の内面的な変化をうかがい知れることだろう。変わったのは、芥川の「支那」や「西洋」にたいする認識という具体的な部分に加えて、「我我の定木を振り廻しやすい」という思考様式でもあるのだ。上海滞在中には、彼は「日本人はどう云ふ人種か、それは私の知る所ぢやない。が、兎に角海外に出ると、その八重たると一重たるとを問はず、桜の花さへ見る事が出来れば、忽幸福になる人種である」(『支那游記』、74 頁) というふうに定木を振り回して語っている。「支那」の「怪しげな人相をしている」車屋の前では、「日本婦人」なら皆「不気味に感ずる」のだと結論を結ぶこともある。そして「何だか敏活な感じがしない」「支那」の車掌を見ると、「敏活」ではないことだけで「日本の車掌」と人種的に区別しようとする。ある意味では、この汽車のなかでも新参者、あるいは「游子」の位置につけられそうな「ジャップ」＝日本人の芥川は、上海埠頭を出たときに乗った馬車のなかでと同じく、身体が揺れているのである。1937 年に

鉄道省運輸局が出版した『支那之鉄道』によると、1921 年頃の上海から杭州までの鉄路は、「滬寧滬杭甬」という鉄道の一部に属していた。その鉄道の総管及び維持監督技師、運輸主任、物品監督の職位はイギリスによって担われ、会計主任と機関監督との二職はアメリカが担当するようになっていた<sup>47</sup>。言い換えれば、「オリヴェ色の洋服に金筋入りの大黒帽をかぶつてゐる」車掌は、「印度人の巡查」のように、イギリスやアメリカ資本に雇われ、鉄道の治安と秩序を維持するために、いわゆる租界警察と似たような役割を担っているわけだ。しかし、その車掌が切符を改札してまわる間、芥川には、交通の整理をしている「印度人の巡查」を眺めていた時のような気持ち良さは浮かんでこなかったようである。中国では「乙に澄まさな」いイギリス人や「金がな」いアメリカ人、それから「游子のポオズを作らな」い日本人と出会い、「紳士」という紋切り型の崩壊を目撃した芥川は、「ジョン・ブル」「アンクル・サム」そして「ジャップ」などの人種的、文化的ラベルについて批判的に考えはじめたようだ。それは芥川が人種という概念を捨てたことにはならないが、上陸当時の彼にくらべると、この時の芥川は人種差別的な、つまり白人優位的な考え方にたいしては疑問を持ち始めており、たとえイギリスやアメリカの権力範囲に入ろうと、馬車のなかの「擬似白人」になることだけは避けられたと思われる。

### おわりに

以上の分析を通して、1921 年の中国という「接触空間」(contact zone)<sup>48</sup>における芥川の身体的位置から、彼の内面的な空間の生成、確認、変化を示した。しかし、私がここで言う「接触空間」は、緒形康が定義した「複数の国籍の人々がいかなる

<sup>47</sup> 『支那之鉄道』、鉄道省運輸局、1937 年、39 頁。

<sup>48</sup> Mary Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London and New York: Routledge, 1992.

媒介をも経ることなく接触し合う空間」<sup>49</sup>とは違う。つまり、多文化主義的な意味でのニュートラルなスペースではない。そもそもメアリー・プラットが描く接触空間は、支配し支配されるという極めて非対称な関係、とりわけ植民地的権力関係が働くような〈場〉である。プラットが挙げる例によれば、「接触空間」は植民地支配される国の前線(frontier)、つまり植民地支配者の到達したところ、「接触」が発生したところを指している。植民地支配者が到達しない農村や内地はまだ「接触空間」にはならない。被植民者たちの行けない宗主国も「接触空間」ではない。言い換えれば、「接触空間」において生起する様々な表象と言説は、必ず植民地の非対称的な関係を前提として持つ。しかしだからといって、「接触空間」における人々のアイデンティティはいわゆる「植民支配者」と「植民地の被支配者」の二つしかないとは言えないのである。1904-05年の日露戦争と1914-18年の第一次世界大戦という二つの重要な時点を分節点として、植民地における〈権力〉の歴史的再分化をもっとも直観的に示すメカニズムは、集団的アイデンティティを作り上げるイデオロギーではなく、むしろ「接触」を起こす人間の身体のほうがだと言ってよいだろう。

「支那」という〈場〉に滞在していた芥川は、最初は「一人の西洋人を擁しながら頻りにはしゃいでゐる」日本の芸者たちみたいに、「西洋人」の「ジョオンズ」とはしゃいでいて心もちが愉快になったのだが、その芥川の目は、しだいに彼の想像した「西洋」から離れていった。「ジャップ」という紋切り型も捨てていった。「植民地支配者」という集団的アイデンティティの代弁者のつもりで上陸した芥川は、自分という物質的な存在(=身体とその身体の機能、たとえば目線や言語など)を

通じてローカルの秩序に切り込んだり、あるいはその秩序の外から眺めていたりするが、その存在自身は土地の人にとっても、彼自身にとっても、既存の紋切り型には嵌め込むことのできない異質な空間(foreign spaces)を作り出している。換言すれば、彼の身体によって生きられたその空間は彼の身体を指していると同時に、その身体の境界線を超えた空間でもあるため、純粹に彼の身体だけであるわけでもない。だからこそ、その空間は、彼自身にとっても異質であって、彼の到達したところまで異質性をもたらすのだ。北京で「支那服」を着るようになった芥川は、帰国したあともそれを着つづけ、車中の客に「大分、長く此方にお出です、ね、日本語が中々お達者だ」と言われたこともあったという<sup>50</sup>。衣服は、身体や肉体の一部ではないが、身体の内面的変化や、身体的位置を示すには大きな役割を果たすために、自分という異質な空間の一部となりうるし、その空間の身体性を示すには不可欠な要素だと思われる。大阪の電車のなかでは、芥川の「支那服」は、彼が「接触」した(「支那」という)〈場〉によって残された痕跡であり、その痕跡は彼の、ここでも揺れている身体、移動している身体とともに、今度は「接触空間」以外の〈場〉に切り込み、芥川の異様な身体を日本の公的空間で作り上げる。言い換えれば、大阪から東京行きの電車という公的空間で、芥川は自分の身体を通じて一つの「接触空間」を作った、とでも言えよう。それにより明白になったのは、中国で、長い四ヶ月の間に様々なステレオタイプの崩壊を体験した芥川が、伊藤博文の『黄禍』があるとするならば、それは不能状態の中国ではなく、極東の新興強国の日本だけである<sup>51</sup>という考えに共感するのではなく、「黄色い顔」と向き合い、「日本」という〈場〉を、そして彼自

<sup>49</sup> 緒形康「接触空間から一九三〇年代の日本と東アジアを考える」、『一九三〇年代と接触空間——ディアスポラの思想と文学』、緒形康編、双文社出版、2008年、6頁。

<sup>50</sup> 張蕾『芥川龍之介と中国——受容と変容の軌跡』、国書刊行会、2007年、318頁。

<sup>51</sup> 飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説』、前掲、94-95頁。

身という異質な空間を考えなおしていた、ということだろう。そこから、中国－日本－欧米の間で作動し、絡まりあいながら東アジアを動かしている「近代」と「植民」のあり方を考えるには、オリエンタリズムの自己－他者認識を批判するだけではすまない問題があるのではないかと、考えられる。なぜなら、20 世紀前半の中国という〈場〉で列強の紛争の中に生きてきた「自己」と「他者」は、存在するそのつどに向き合う相手によって常に変容し、そしてその変化によってまた新たに構成されていくものだからである。また、植民地主義の言説における「植民地支配者」や「植民地」の概念も、その絡まりあう関係の場に踏みこみながら捉えなおしていくべきではなかろうか。

「接触空間」における芥川のような知識人＝旅行者の身体の実験が興味深いのは、そこに他者性との「接触」があるからである。スラヴォイ・ジジェクとともに、ルイ・アルチュセールのイデオロギー論が着目するのは（資本主義社会の）日常性のなかに住み込む身体であり、その身体は社会の細部では主体性を働かせるが、おおまかに考えると、イデオロギー諸装置を通じて浸透され主導されていくような、きわめて受動的な存在だとも言える。しかし、トラヴェリングの状態、他者と「接触」する非日常性のなかで、体験し、実践し、反応するこのイデオロギーが浸透した身体は、芥川の実験が示しているように、反発的な異質性を生み出し、それまでより重層的な身体的空間を作り上げるのである。

その個人的、身体的空間が自分の属した社会に戻ると、今度はレイモンド・ウィリアムズが言う「媒介」(mediation)<sup>52</sup>のように、上部構造と下部構造の新たな関係が形成されるのである。しかもこの「媒介」は、上部構造と下部構造の外部で生きていくのではなく、「媒介」自身が社会の一部とし

て積極的に作動するのである。たとえば、芥川の異質な身体空間は、旅の時とは異なる時間と空間で、「書く」という彼の行為を通して、国家という空間に入り込み、国家の「身体」を作りあげることにつながっていく。しかも、ただ「書く」行為より、国家のイデオロギー装置のひとつである大手新聞紙や雑誌で「書く」ことのほうが、より重要だと言える。メディアの複数化と非対称化、そして読書の普遍化による読者層の複数化と結びつくことで、個人という空間が「媒介」として成り立つのだ。個人個人が書いている新聞記事は、共有される想像の共同体としての日本において、読者のいる空間をすべて「接触空間」に組みかえる役割を果たす。芥川が上海に着いた翌日に、彼を中国に派遣した大阪毎日新聞は、「特派員芥川龍之介の中国印象記を近日連載！新興作家が見た新しい中国を知るなら大阪毎日新聞を。」<sup>53</sup>という広告を出していた。民国時代に入ってから中国の、政治、風俗、思想およびその他のあらゆる方面を日本の読者に紹介することがその目的だったと言えよう。また、その連載は四年も経った後の 1925 年 11 月に改造社によってさらに単行本にまとめて出版されたことから、当時『支那遊記』の反響もある程度推定できるだろう。たとえば同時代の文学者のなかでも、松村梢風、横光利一、犬養健などに『支那遊記』があたえた影響は甚大であったと言われている<sup>54</sup>。また、芥川龍之介の視察旅行時は 12 歳の少年であった松本清張が 45 年後にヨーロッパへの視察旅行を遂行したのは『支那遊記』の代償行為という指摘も存在する<sup>55</sup>。それらの文学者らが生産した「支那」をめぐるテクスト間の関連や、それぞれの文学における連続性を乱暴に指摘しようとするつもりはないが、芥川の支那服がそうであったように、『支那遊記』もまた異

<sup>53</sup> 『中国遊記』、前掲、11 頁。拙訳。

<sup>54</sup> 小澤保博「芥川龍之介『支那遊記』研究(上)」、前掲、36 頁。

<sup>55</sup> 小澤保博「芥川龍之介『支那遊記』研究(中)」、前掲、1 頁。

<sup>52</sup> Raymond Williams, "From Reflection to Mediation" in *Marxism and Literature* (Oxford University Press, 1977), 95-100.

質な身体空間をつくりつづけるというのは、間違いないだろう。

(ふあん じゅんりやん・コーネル大学大学院博士後期課程)